

せている。

そうして、やがて、アヅキ、ゴマ、ウリ、の種が、武蔵の真福寺遺跡から発見された。その時代になると、一切が実用本位のものに変化してくるが、原始農業の開始が思われ、経済活動が多忙になって来たものである。

なおこの縄文晩期の文化的影響が、西日本にまで及んだ事は特筆に値する。が、この間、所謂政治性なるものが、一顧だになかった、と云う事は、余剰生産物なり、余剰労働が手元に蓄積され、共同聚落の隆盛を意味している事であり、然もなお、それが階級を産み出す為めの根拠にはなっていない事である。

即ち、物質的根拠によって、政治的あるいは階級社会は、成立するものではない事を、縄文式文化の時代の歴史が、判然と語り、且つは実証している事である。

彌生時代と帰化人文化

縄文式文化の末期に、西日本にあらわれた様相の中で、縄文文化遺跡と彌生文化遺跡が、全く相異った場所にあつて、両者の併存を認める遺跡がない、とは云え、縄文末期と彌生初頭に、時を同じうして同時に存在したのかも知れない。

この頃は紀元前三百年から百年の間の事であるが……。当時は、内藤虎次郎氏の言をか

りと、

越の尉佗、朝鮮の衛満を例にあげて、『漢の疆域の外にあつて、国を建てた、色々な国は、多分は戦国以来、秦に至るまでの間に、（前四〇三年―二二〇年）外国に流れ込んだ支那人によって形造られた。』と指摘している。

これは支那人である他国人が、侵入された方の国民が自身の手によって、国造りをやったのではなく、支那人の手によってなされたものである、と共に、当時に於ける、漢民族の外域への活発な動きと、その影響力の強大さを語っている。

周末に於て、燕が朝鮮に発展した時が、前三百年代であり、漢の武帝が、朝鮮を攻めて楽浪郡外三郡の殖民地を、朝鮮の北部に建てた。

この頃、朝鮮は漢人の流入と、朝鮮の内部そのものに戦禍が絶えなかった、と云う事は、流亡の民が、平和を求めて多数いた事にもなる。

この流亡の民が、生活と平和、あるいは、他の地区での、捲土重来を夢見た一旗組もいたであろう、それ等が、住む為めの土地を求めて、この日本にもさかんに流入しなかったとは云えない。この人々が、その祖国の風習と思想と生活的習慣と、知識と才能と技術を持って渡来した。

その渡来した人々は、当然、縄文式文化態形を持っていた原住民と、異なる生活様式を持っている。

この相異なる生活様式が、相互間に平和裡に保たれたか？どうか……。

渡部義通氏の文意を借りると、より安定した生活を求める事を根拠として成立した。

元来、末開人が、その生活を安定させ発展させる為めには、二つの方法がある。

と云い切った後で……

生産技術あるいは、より以上の生産力の発展を獲得する事であり、もう一つは、他の末開民族の征服であろう、と云っている。

が、これは、越の尉佗や朝鮮の衛満にはあてはまるであろうが、又、侵略軍を持つてする奪略征服が、常態化した時代での、権力闘争的な習慣と、征服と略奪を正当化した時代での事である。こうした時代の経済闘争的な見解を底位に、理論を展開させて行く、それだけの事で、併もそれに事よせて、共同体的なものが強く存在したとしても、相対的に内部的対立に刺撃されたとか、内部的な分裂、即ち階級成立の萌芽のある事が推察される、と書いているが、こうした公式主義的な観察が、どこをどう思つてそうなのか、一寸判断に苦しむが、勿論当時のこの日本に当てはまる何ものもないと思えるが、要は、こうした事が、事実として当時の縄文時代末期にあったであろうか？

当時、或種の安定の中にあつた先住民であり、原住民である縄文式文化人は、一定の地域に、侵さず侵されぬ地域的居住者であつて、その共同体相互間は、争奪闘争の如きものはなく、平和な、祭祀呪術を持つ宗族的集団と云う、多数の連帯性に培われた聚落体であ

つた。

そこへ、当時としては、その輸送力から考えても、小數ずつの移住であつたであろう、この人々が、例え武器を持っていたとしても、どうして征服など考えられよう。むしろ、流れ着いた場所から、平安な地を求めて移住したとしか思われない。

然もこの場合、先住民族は丘陵地の畑作（原始農耕を認めるとしても）と採集経済であり、彼等移住者は、農耕民族、それも稲作をする湿地帯の利用者であり、自づと生活条件の違いから、利害関係の生づる事もなく、為めに、先住民はその初めに於て奇異の感さえないとか、同色人種であり、無関心であつた、それが為めに両文化が、同じ時期に共存したものの様に思われる。

この移住者は、おそらくは、先住民の邪魔にならないように、ひっそりと生活を建設し続けたであろう。

為めに、この時期は、帰化人との不同化時代であり、自づと、その必需品である土器その他が共存する事なく地域別に続いたものと思われ、その為めの、北九州に於ける縄文式文化と彌生式文化に、判然とした境界が作られているものと思われる。

唯この場合、先進国人である移住者は、その祖国に於ける生活慣習と、当時の彼の地に於ける権力支配的な、社会組織と慣習を、彼等自身の生活環境にあてはめ、この移住地でも、その儘のものであつたに相違ない。その思想と宗教と習慣が、先住民に対する微力さ

の自覚、平和と安寧を求めた移住の目的のために、小教故のひよわさや、先住民に対し迷惑や邪魔にならない、ゆるされた地域での生活を作りあげたであろう。可能性のない侵略的な構想や、征服のための移住でなく、まして、闘いに明け暮れた祖国での苦惨から脱して来た彼等が、その余裕のない無力さから考えても、争いを進んで求める筈もなく、むしろ日影を求めて、その中で生きる以外に方法はなかった筈である。

若し彼等に、この時機に於て、権力支配的な征服類似の行為があったなら、帰化人そのものが潰滅した事であろう。その上、言葉も通じない彼等は、それだけでも自らを守るために急であり、為めに、次々に来住する同国人との聚落が、ふくれふえてくる事にもなるであろう。

元来人間は、巧利性とか利害関係を除いた所では、人間故の融合性を、連帯性として共通のものを持っている。それが現在の人間より、より単純であり、利害関係も薄かった時代でもある、この頃は、融合性が永い年月の間には、混交の世界を作っていた事であろう、と同時に、帰化人の知識と才能と技術とが、原住民に重視され、共存の文化、即ち彌生式文化が急速に延長される事にもなるのである。

初期彌生式土器の遠賀川式土器に見られないロクロ使用が、彌生期も須玖期の土器になつて簡素化され、劃一化されたものとしてあらわれてくる。

この事によつても、既設の事情が推察し得るのである。

北九州、田川郡香春の丘の第三峯に銅が産する。そこから程近く、遠賀川の中流、田川平野香春三山の三柱神は、下の八幡神の神格は韓地から渡来した冶金、鑄金の分化神であった事は、すでに諸説の同意する所であるが、この宗廟宗教を持参した氏族によつて作られた土器が、初期彌生式土器なのである。即ち銅器、鉄器が彼等によつて作られていないとはいえない。

又、正倉院に伝えられる、豊前の国の戸籍簿に、六八三人中五八九人が泰氏につながる泰部（泰氏の部民）、及び勝姓になつており、又八幡宮の禰宣に辛（韓）島の勝の姓の人在る。

因みにこの八幡宮の創建は五七一年であると云う伝説もある。

が、この八幡宮の創建は、公然と建設され崇敬の対象となるまでには、そこに至るまでに、多くの生活的苦闘や、原住民との混交から来る信頼感や、融和のための永い年月と歴史とを経過しずには、成立する事にもならなかったであろう。

以上の様に、先住民と帰化人との不同化時代のあったあと、移住者の生産力や、その使用器具に対しての、知識や才能、技術が相互交流（見よう見真似もあろう。）が、永い年月の期間を経てなされたであろう。と云う事は、後進国人である先住民が、先進国人である帰化人の、知識と才能と技術とを、自己のものになし得た時、即ち須玖期の時代になつて、劃一化が進んだ様に思われる。

かくの如き時代とその推移を、渡部義通氏が、征服と被征服の關係以外に考えられないといっていることは、いささか驚ろきであり、要は自身に都合のいい様に強弁していると思われぬ。

ただこういう事がいえるのではないか。それは、先住民である縄文時代人は、その生活の中に、否、生活そのものが、祭祀呪術の方途の中にあつた。そこへ、祭祀、葬墓を異にした移住者の生活様式が、すでに彼等の故国に於ける生活環境が、権力神的宗廟と、権力支配的社會組織のものになっており、それを直輸入した形で、原住民族に接した事と、その技術や才能が、原住民に尊敬の念を抱かせ、ロクロ使用や金属製法のように、驚異に値するものもあつたが爲めに、呪術施行者が長老が、この新知識を取り入れる智者ならばあるいはそうでなくとも、稲作に見る様な、異なつた生産方法と、經濟生活の豊富さを目撃しただけでも、彼等の生活手段や様式を取り入れる事にはなる。

又それが延いては、宗廟形式をより權威のあるものとして、取り入れ、従来の祭祀と呪術を加味したものに作り上げましょう。と共に、帰化人の持つ支配肯定の習慣が、この呪術者や長老をして、利己的に、あるいは巧利的なものの考えから、ロクロ使用を神よりの授けと讃えたり、金属製品を独占する口術に、祭祀や呪術を利用し、行わないとは云えない。

それは、須玖（奴国といわれている）は、共同体の族長であつて、宗族の長である範圍

の、権力的な支配者を意味するものではなかつた。その地おら、前漢鏡三十四ヶ、細形銅劍三ヶ、狹鋒銅矛五ヶ、狹鋒銅矛一ヶ、ガラス製壁、等が、祭祀遺跡と思われる所から出土した。これは、墳墓からのものではないのである。

これは、漢の先進的な權威、即ち帰化人の新時代的な威力が、交流の中から受け継がれ、それを背景にし利用した支配者として又權威者としての裏づけであろう。こういう形態から、権力的な支配勢力は強固になり、徐々に強権的なものにいくらがえしてくる。

これが、延いては、後に女王卑彌子の、万人をまどわす偽瞞政治につながるものである。

即ち先進国人である帰化人による輸入思想と、その才能や技術、習慣にまで及ぶ、憧憬的なものまで変化した進歩性である。

こうした意志の働らいた世界、ここにこそ、権力的な支配勢力の発生原因があり、階級社會、即ち政治の発生主因がある。

併し、祭祀、呪術の伝統に便乗し、宗廟宗教的な權威をかりた支配者が生れてはきたが、それは司祭者や族長が、一種の権力的支配の傾向をもつた初期の階級性、即ち支配と被支配の關係が生じはしたが、末だ共同体そのものは破壊されてはいない、その段階であつて、権力支配の制度以外に知る事のなかつた、その習慣を身につけた、こうした帰化人との交流が、密接になればなる程、支配者に取り入る事なしには、生命の危険も考えられる帰化人にとって、その知識と才能と技術が、有力な生活手段であると共に、時には生活上の武

器ともなり、又その習慣こそ、未開人の尊敬の対象でもあったであろう。それ等の、よき経済的先導者ともなっている日常が、支配者の側近としての、有力な存在理由にもなる。かくて、相互交流の中に、独立自治、共同体としての、祭祀呪術によつていた宗族共同体は遂次変貌し、所謂、卑彌子以前の百余国が、血と争奪の渦を起し、遂次解体する事にもなるのである。

しかもこの場合、祭祀呪術の施行者は、家伝とか、相伝によるものであり、神の媒介者であると共に、その司祭としての継承者でもあった。

この永い民族習慣の中の一種の絶対者が、帰化人の習性と知恵と権力的習慣を取り入れた、と云うより、先進国人の知恵や習慣、社会生活の模倣から、屋内的な呪術宗教を、先進国人の宗教である宗廟教的な祖先崇拜の権威にゆりかえると共に、その内部に、過去からの伝統的な呪術宗教を利用して、民衆を掌握する時代的変遷を遂げるのである。

そうした事柄との関連に於て考えられるのであるが、彌生前期の共同体が中期になつても、その葬墓が、未だ群集墓域をあらわしており、そこには、未だ権威張つたものを見せてはいない。

又、金属の熔解法が幼稚であり、その技術者が少く、この方面では発達が遅れているのは当然であるが、先進国人の技術を、原住民が修得する為めには、永い年月を要したであろう。が併し、それに反し、畑作や稲作は、その作業結果が目に見える事と、その耕作は

素人でもできる性質を持つてゐる事ではあり、ここに稲作伝播の早かつた事が考えられる。

その上帰化人の数が、海や川を経て、続々と増加し、後には全国で二万を数えられたと云われる。この人々が、彌生式文化から古墳時代への土器の変革と、鉄器の使用とに、偉大な影響を持った、貢献者であつた事は、何者も否めない事実なのである。

なお、言語的にも、工作用語として、朝鮮新羅の古語からその儘使用し、あるいは転訛したと見られる言葉で、現実に残され使用されていると思える言葉がある。

それは、ナラー奈良（私の国の意）があり、スキー鋤、ホルー堀る、ハター機、カマー釜、キモノ着物、があり、雅楽は朝鮮から来たものとの説もある。

日本の現代に至る文化（字、言葉）の原点に漢、韓の占める位置は偉大であり、特に韓の影響の甚大さは、同化と発展の中に推積されていて、後統する日本史は、これによつて成立し得たと云つても過言ではあるまい。

なお古墳時代後期から有史時代に入つてからの事だが、部属聯合から氏族聯合へ拡大したものが倭国内にでき、西日本では、かわちのふみ、となり関東では、やまとのあや、となり、後には日本の有力な豪族になつてゐる。

始めになされた、この人達との文化交流こそ特筆す可きであろう。

かくて、丘陵地から湿地帯利用に、遂次生産形式が変換がなされた。

ここでは、初めに金属にかわる打製石器が使用され、打製石器では熟練工でもある原住

民は、鋤、鍬に等しい石斧や、稲穂づみの為めの石包丁、等々、石器の多数出土する事が、その間の消息を語っている。

これは、原住民側としての主体性に、石器製作技術と、土器製法に、熟練していた事が契機となつて、憧憬と模倣と、創造意欲のあつた事も考えられる。

これは、意識的に自ら創造したものではなく、底地に移住した帰化人の生活の知恵の伝播であつたと云えるかも知れない。

かくて、聚落は著るしく水に関係の深い、立地条件を求めて移行していった。

この場合、水稻に関し、日本形、ジャバ形と事更に分類して考える事は、過ぎた誤りがあるのではないのか。それは経験と知恵の交流が、モミの研修を生み、初穂祭りの起源で考えられる様に、石包丁による初穂づみから端を発した、早種と晩種を見分ける機会を作る様に、遂次、品種の改良結果を産んだと思われぬ。

又、石斧そのものにしても、今山、今津の石器の在り方が語る様に、今山は帰化人によるものであろうか、須恵器を混じえたものを持ち、今津の方は原地人であるかも知れない。共に時代的には大差のない時期であり、相互の交流を意味するものの様に思われる。

ただ実用本位の石器の太さは、生産部門としての、農業への意識的な方向づけであろう。要するに知識や才能や技術の交流が、見聞からの創作や、物真似もあろうが、要は生産に於て、原住民の立場や努力が、よりよいものを取り入れる、当然の行為であつて、外か

らの影響で内部の遅れを早めた事でもある。

その実証としては、両民族が対立した、二民族の文化を残したと云う形跡がないのであつて、交流がはじまると間もなく、両民族の融合がなされていったもののようである。

これをしも、歴史発展の法則と云う、妙なものに囚われて、それこそ何でもない当然の事としてなされた、人間が人間である為めの意欲の結果をも、公式的に規定し、固形化して見たがる、妙な文化人がいるが、うなづけない事である。

なおこの場合、社会に発展法則なるものがあつて、その様に動いていたと云う、宿命論的なものではなく、人間性の成熟や、人間的な創造性そのものこそ、法則の原体なのであつて、それを無視した人間不在の皮相な規定付けの中には何ものもなく、史実は唯、人間が質的变化をして行く事で、知恵と才能と技術に、質的变化を遂げつつあつたと云う事なのである。

なおこの変化が、ロクロ使用や、稲作、及び、青銅鉄器、熔解等々により、隔世的な変化を遂げてゆくのである。

又神祀に対する方途も、遂次変化し、堅穴住居内にあつた祭祀呪術が、宗廟的な空間建築の形をとり、祭神への崇敬が、祭祀呪術をも加味同化して、一体化してきた。

これが、ずーっと後期になると、帰化人の先導と技術的介入を思わせる、古墳時代の様相ともなるのである。

前漢の武帝が、朝鮮を征服した時の四郡の一つである樂浪を、殖民地の一つとして朝鮮の北部にたてた。この頃、朝鮮には漢人の流入が多かった。

一世紀にはここを越えて、漢の都、洛陽にまで使いを送る国があった。

また五七年、奴国の使人、大夫が樂浪郡までしばしば往来した。

こう云う事が何故興ったか？

それは帰化人のもつ知識と技術と、それを生かす、生産資材と成品の所在地であり、成品が豊富にあると思える憧憬が、帰化人から語られる事によつて、思われ考えられたのではなかったか……。

これ等を欲する事と、支配者の新文化獲得の意欲の爲めに、当時、奴、末盧、伊都、不彌、の四国が、互いに桔抗し、宗主権の獲得を競う爲めに、帰化人の祖国、漢の正朔を奉じようと、遣使を断行したものであらう。

それが爲めに、これも帰化人の技術による舟も使用され、帰化人の故国であり、当時としては夢に見るすばらしい文化の国である、その地への朝賀の使人が出されたのではなかったか……。

現在、この二十世紀に生きる日本人が、かつての明治年間に於ける、鹿鳴館時代を問はずとも、アメリカへの迎合追従と、外国崇拜の島国根生や、後進国的劣等感が、外国のよいも悪いも取り入れて、いわゆるアメリカナイズされている。又外国帰えりを、特殊な権

威でもあるかの如く結びつけて、考えようとする習慣さえ持っているものがある。この現実を思えば、うなづける心境であらう。

昭和四十年六月二十日発行の、日本文化史大系改訂新版の中に記載されている、日本民族文化の形成という、項目の中の『結』として、……西歴紀元後間もない頃、満州にいたある種族の移動により、在来住民を征服した、渡来民族が大和に国を建てた。

と、岡正雄氏は著しているが、こんな独断がまさか書かれていようとは思わなかったの

で、一寸意外な感にうたれたのと、それへの反論を書いておこうと思う。

と言うのは、西紀前後の倭国の状態を考えてみて、その頃とそれ以前、彌生前期から、帰化人の信仰になるものとして、渡来した宗教は、鋳造冶金の神として祈願した、北九州遠賀川流域にある八幡宮や、その周辺の古墳、及び後の古墳時代に於て解るように、祖先崇拜のものが多く、呪術的なものはその主体をなしてはいない。

なお万人が知悉するように、彌生期の頃、卑彌子が邪馬台国で行なっていたのは、呪術宗教であったことは、歴然たる事実である。

この当時唯一の強大国で、その政治的指導原理が、呪術宗教であったことは、遠く縄文時代から継承されたものであつて、この頃突然出現したものでないことも、又何人も認め得るところであらう。

この卑彌子の出現した時代は二、三世紀のことである。とすると、この渡来した侵略の

事象は虚構であり、無理にでも捏造することによって、天皇系種族を特殊な存在として、これを権威づけるための、作意があるように思えてならない。

又、崇神紀十一年の条に、『この年あだしくに人多く帰す。』同十二年三月の詔に『異俗訳を重ねて来き、海外既にまいおもむきの（帰化）』とあり、漢、韓人の帰化がしきりにあったことを伝えている。

この崇神記の条文のどの項を見ても、一言、そして一字だに、言葉の同似性をうたつたものではなく、同文と言った意味のことさえない。

若しこれが海外から来た侵略の征服者なら、自身の言葉と習慣は堅持するであろうし、末だかつて征服者が、時にはその権威の表徴でもある、自分達の言葉を忘れ、習慣を捨て、土民と同化した、などということは、きいたこともない。

又、西紀後間もない頃、渡来した民族と考えられるのは、満州にいた高句麗族、あるいは夫余族といわれる民族であり、当時の技術で、数十、あるいは数百を数えなければならぬ舟での同時乗船は、不可能といえる筈の中を、舟を利用し決行して、小數では征服という事実はおこり得ない、を敢えてなし遂げて、在来民族が、考古学的に、又彌生遺跡で証明されている、相当広大な部落集団をなしていたそれを征服し、大和に国を建てた、ということになる。

こうとしかとれないことを、公然とこの著者は書いているが、この高句麗族や、夫余族

には、すでに文字があり、在来の種族とは、言葉も違っていたとしか考えられない。

それが卑彌子の時代になって、完全に文字も言葉も忘れ、宗教もかえてしまい、その遺跡、遺留品の何ものもない、と言えるであろうか？ 若しこの種族が征服者なら、文字として、あるいは記号、遺物としてでも、彌生中期以後の全彌生期間、及び古墳時代に、遺跡、遺物があつて当然である。

当時の土器、青銅器、古墳、壁画、その他等々に、このことに關しては、何等のものも見出だされてはいない。

以上が、岡正雄氏が、ホンの数行かかれた部分に対する、筆者の反論である。

一〇七年、面国王師升が、漢の承認を得るためか、生口一六〇人を伴つた遣使があつた。

この生口とは、強制労働させられる奴隷の事であつて、出稼ぎの爲めではないのである。先進国に、あるいはより高度の権威に対し、阿諛迎合し、人身を材料に、自身の利得を計り、榮達を求め、自らを守る爲めに、権威の倍增をねらつた行爲であり、自身の爲めに他人の犠牲を敢えてする、過去に於ける村落共同体では考えることもできなかった、この野蛮行爲が、平然と遂行されるまでに至つた。

この心境は、現在、二十世紀のこの時点に於てさえ、名をかえて実行されている。

現在の支配勢力である政治家やその背後のものは、自らの利益を護持する爲めに、民衆

に犠牲を求め、資本主義、それが国家資本主義（共産党政治下）であろう共、国の為め、あるいは労働者の為めと云う口術によつて、又、ある時は民主主義を守り、あるいは人民解放の為めと称して、戦争準備や、原水爆の製造実験を敢えてし、人間生活には何等の必要もない、武器製造や軍兵の訓練をする。

又大衆の犠牲に於て、栄える事を当然の事として、中小商工業をつぶし、あまつさえ、貧乏人は麦を食え、と平気で云う……。

この様に、民衆犠牲の現実環境が、生口一六〇人を送った一世紀の頃と、どれ程の差違がある。

ここに至り、人間の慣性と生活が墮落すると、あとは一瀉千里にこの惨忍な社会形態が持続され、以後は色をかえ形をかえて習性として仕上げられてゆく。

一、二世紀の頃、朝鮮半島南部、辰韓（後の新羅）からは鉄が採掘されており、滅（ワイ）、倭、馬韓がその売買に従事していた。

即ち彌生時代中期から後期にかけて、倭にとって垂涎の標目であった、韓との密接な関係にあった事も、当然だったといえる。

彌生後期に入つて、銅剣、銅矛が盛んに作られるが、祭祀遺跡と思われる場所から出土し、墳墓からはない事などは、埴田人と原住民との混交がスムーズにゆき、司祭者が、これを權威保持の為めの用具として用いたものであろう。これ等は、埴田人そのものによる

ものではなく、原住民のなした業跡としての、傍証を意味するように思える。

なお彌生後期の前半、二世紀に入ると、石器が非常に減少した事は、鉄器の普遍化を教えると共に、もともと原住民に技術と能力のなかった部面に対し、移入文化が珍重されると共に、宝物的なものから、実用的なものに変化し得た、原住民の技術の修得と、能力の発展があった事が考えられる。

と云うのは、鉄器の増産が石器を逐次駆逐した事にもなる。

やがて一世紀から二世紀半ば、漢の圧力が弱まり、それが韓の諸侯が自立の風を呼び、為めにかつての、漢の威を背景とした、倭の支配力は背景をうしない、時も時、鉄器の自立増産と、普遍化が、技術的に確立された所から、生産力の増進と、それからくる自立化を促進され、權威の分立化と共に、分裂、桔抗が生じて来た。即ち特定の權威が、權威としての特権と資格を喪失してきた、とは云え、この權威とか権力支配の経験は、人間相互間に、致命的な惨忍さをもつて、人が人を支配し掠取する、未だかつてなかった野蛮な慣習を作りあげていた。

初めに主動権争いが生じ、始めてこの地が、本格的な、権力奪取のための民衆使喚と、その犠牲に於て、闘争場裡と化すに至った。

この戦闘状態とその間の消息を、宮崎康平氏の『まぼろしの邪馬台国』が詳密に著述している。

以下その著書を主としての参考に書いて見る。

記紀の編さんされる頃までは、未だ日本には固有の文字がなかった。

古事記や日本書紀の編さんの時には、部分的に表音文字が使われている。だから、文字の意味には何の關係もない漢字が、一種の当て字として使用され、後の世の人に、間違つて解釈される様な、意味にさえ用いられているふしがある。

それだけに、意味の異なる文字でも、語呂の合う当て字をあてたとも云える。

特に、日本神話の中で、重要な位置を占める、豊葦原瑞穗の国と、葦原中つ国は、本来は二つの国なのに混同されて、古代二大王朝の歴史が抹殺されている。

又、仮名使いのわづらわしさから、仮りに、そのまま表音文字に改らためられたとしても、それがかえって、記紀を難解にしている。

文字は唐、韓の言葉と読みであり、耳で書き、耳で書いたと云える、口部族からの口述記だから、当時の倭語にあった言葉に相当する、音表であり、文字を当てた字である。

即ち耳による当て字であり、英語を読むのに仮名をふる、この類いである。

ここいらが盲目の著者なるが故に到達し得た、讀う可き境地であり、開拓の世界であると敬意を表する次第である。

この著者は云っている。

三、四世紀頃の、魏志倭人伝に書かれた、邪馬台国時代の前後の神話は、神話でなく実

話であり、有明海を中心とした事件であり、物語りである。

天照大神は肥前の大女王、須佐之男の命は肥後の大王、大国主命は速賀川流域の大王、猿田彦大神は築後川流域の大王、いわゆる天照大神の岩戸隠れは、天照軍と須佐之男軍との交戦で、天照大神が戦死して、遺体を葬る時の魂入れの行事であり、天井石を掛け渡す、古墳埋葬の形式である。

その他記紀のどこか頁を見ても、神々が天上から降りて来たとは書いてなく、勿論天上の物語りではない、地上に繰り拡げられた闘争であり、ロマンスである。

これ等を考慮すると、天孫皇臨その他は、倭人伝以前からあった伝承であり、彌生時代、前・中期頃からの伝説引用であろう。(筆者)

又倭人伝当時は、それぞれの国が、けっして一国だけで飛び離れていることはなく、記載された国々は、互いに隣接しあつて並んでいる。そして、その国の広さの程度は、現在の郡程度で、それ以上大きくはない。

こうした著者の着眼は正しく評価される。

この時代以前の縄文期は、小国と云うより、河川、湖沼、溪谷、丘陵、山岳の屋根等を境界とした、共同村落体、又は宗族共同体であつたことの究明によつて、この邪馬台国はより確実に立証されるであらう。

住(トド)まる事、七八十年、倭国乱れ、相攻伐して年を歴(へ)る。

いわゆる大争乱の巷と化したのである。

かくてその争乱の中に、邪馬台国、女王卑彌子の出現となり、時を追って、その体験がより巧妙なる能力を駆使する、倭の五王を生み、やがて天皇の称号が、漢藉の利用と改ざんによって生誕した。

この権力的支配の迷蒙と惨忍と迫害とが、権威に色づけられ、迷信によって構成される。人が人によって支配される不平等と不倫の、野蛮極まる社会機構が、構成されるに至つたのである。

然るに、このいたましい社会関係の創造に対し、渡部義通氏は、その著書の巻末近く、マルクス、エンゲルス、インドシナ論の一文を左記のように引用して書いている。

『然しながら、吾人は、牧歌的な村落共同体は、いかに危険のない平穏なものとして映じようとも……、人間精心を考え得る、最狭隘な限界に拘禁し、人間を自由意志なき機構となし、伝統的習慣の奴隷とし、なお人間の総べての偉大性、総べての歴史的発展に於て、創造し行く精力を奪掠してしまふものなのだ。』

蒙昧の闇にとざされるよりは、われわれは、この苦しい社会関係の成立にひとまづ嬉ろこび、北九州勢力の没落と、畿内勢力の発展に、お祝いの言葉をのべねばならぬ。

云々と、かつての人間相互にあつた美わしきものを蹂躪し、個人の自由発意による創造性と、自由意志によつてなつた平和な共同自治の村落を、支配者そのもののために歪曲し、

破壊する、権力支配的蛮習の存在と継続を、嬉ろこび讃えるのみならず、人間なればこそその、理性ある平等な共同融和の世界や、人間性に於ける美しくも優雅なものを、又平等な連帯感にのみはぐまれ保持される、こうした諸々のものを、権力的抑圧によつて、一方的にきめつけ、人間を生産用具化し、単なる機械視する、その強権的支配や、その為めの政治的動向を讃え嬉ろこび、あまつさえ、以後繰り展げられる奴隷文化を、彼はこよなく愛するのである。

なおその上に、意志による創造としての、尤も陋劣で野蛮な遺風ともなつた、人間が人間を支配し、強制し掠取する、この想念上の墮落を、創造性として讃美する、この愚劣な強権政治家としての論理を、平然として宜べている。

ああやんぬるかな。

人間が人間を支配する、併も強権をもつてする、この野蛮行為を肯定し、その固定観念から脱することのない、強権盲者なればこそ思惟するところであり、詮術べもなし、と云えるであらう。

後記

——私と云う男——

この私から

正義を築き守り

自由と平和のための

闘いの哲理を除いたら

何が残る

何もない

これだけで生きてきた

これは私の生涯の証でもある

一切をなくしても

不正や矛盾と妥協ができないのだ

こんな、卑怯で愚劣な生涯を終わる程

この思想と哲学と

真理探究の旅は詭弱ではない

最後に

そして最期の瞬間まで

これは、私が私自身を守る

最後の咎だ

ああ……

これこそ人生の要害なのだ。

この詩は、長かった苦難の過去を生きてきた私の人生の下で、常に、ともすると妥協的な怯懦な生活から、踏ん切りをつけさせた心境をうたったつもりである。

私には生涯かけて一人の師があった。

それはフトした縁で、十七、八才の浪々の私に、メシも食わせる、そして勉強もしろ、と、何等の報酬を求めることなく、仏教関係の本が一杯つまっている部屋に通わせて、ある時は友の如く、ある時は我が父の如く、又ある時は師の如く、語り、学び、教えてもくれた、下谷に住居した高橋鈍と云う、開業医であった。彼の師は常に云っていた。『仏教は哲学である。』と。

こうした、金もない、働らくこともない、妙な生活が半年以上も続いた。

その師もすでになく、その家族との音信もないが、その前後からの、アナキストとしての私の運動は続いた。

その中で、今に猶、この私のような、物事に無頓着で、無精で、暢気な奴が、兎に角に生き続けてこられたのは、人の世の情けであると共に、友や人の世の美しさであろう。

この『人類史観概要』が、世に出るためにも、並々ならぬ、友の情けがあったればこそで、特にいと古き友『なみさん』事、若杉浪雄君は、私の精神的な、そして物質的な苦境である筈の所を、面倒臭がりもせず、親身以上に東奔西走してくれた。

お陰で第一回の出版となったが、その後も何かと世話をかけっぱなしであり、あまつさえ、今度の補修再版を出すに際しても、それが全的な肝入りによるものであり、資金は勿論、衣食にまで及ぶ、友の厚い交誼と友情が、この本をなさしめた、とつくづく思うのである。

友よ！ 有り難う。

一九七十年二月

長谷川

武

神奈川県川崎市登戸七九五

著者 長谷川 武

印刷所

世田谷区経堂一六六一五
エルデタイプ社

TEL (四二九) 一〇六七

定価 三百円 (郵別)